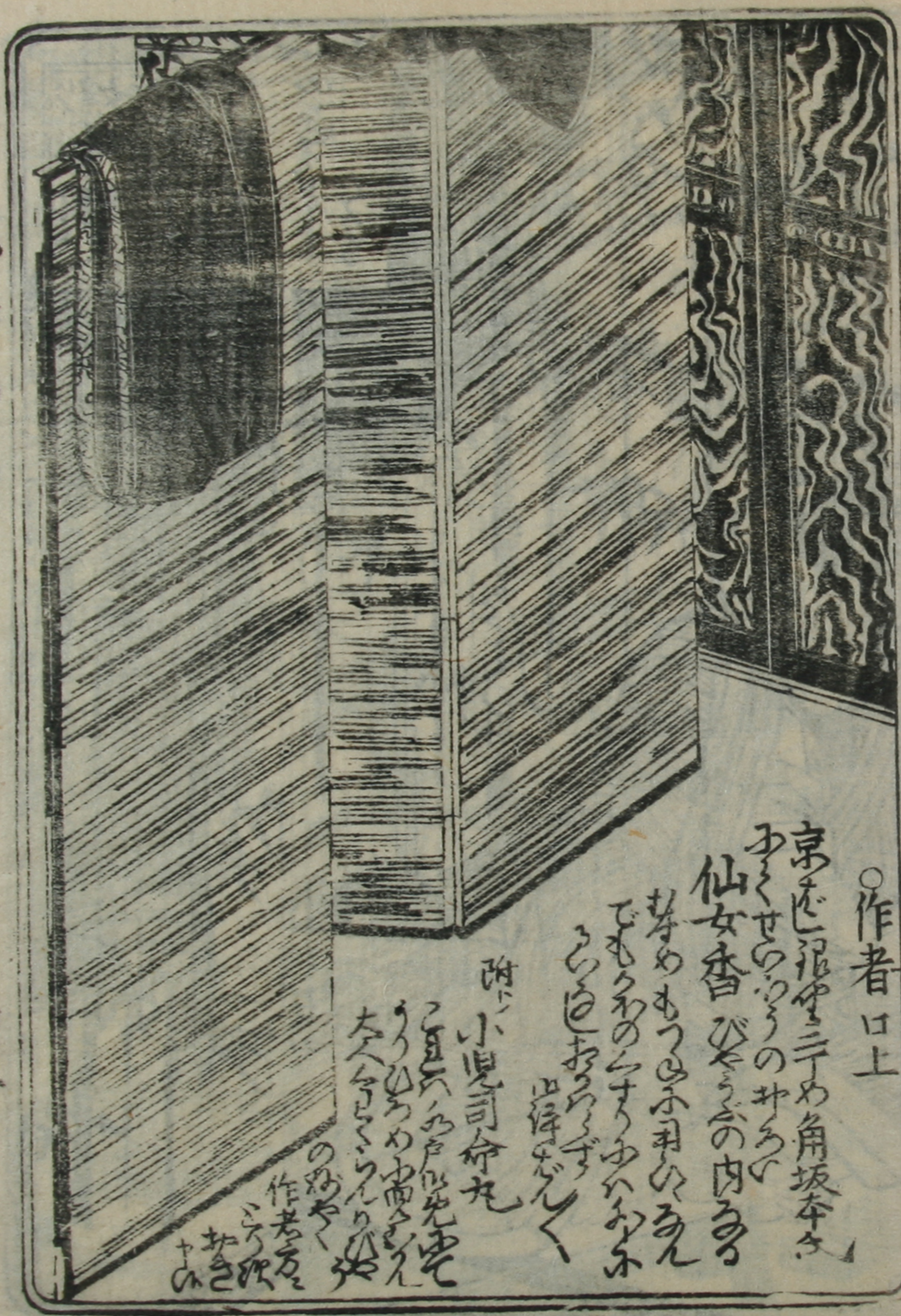


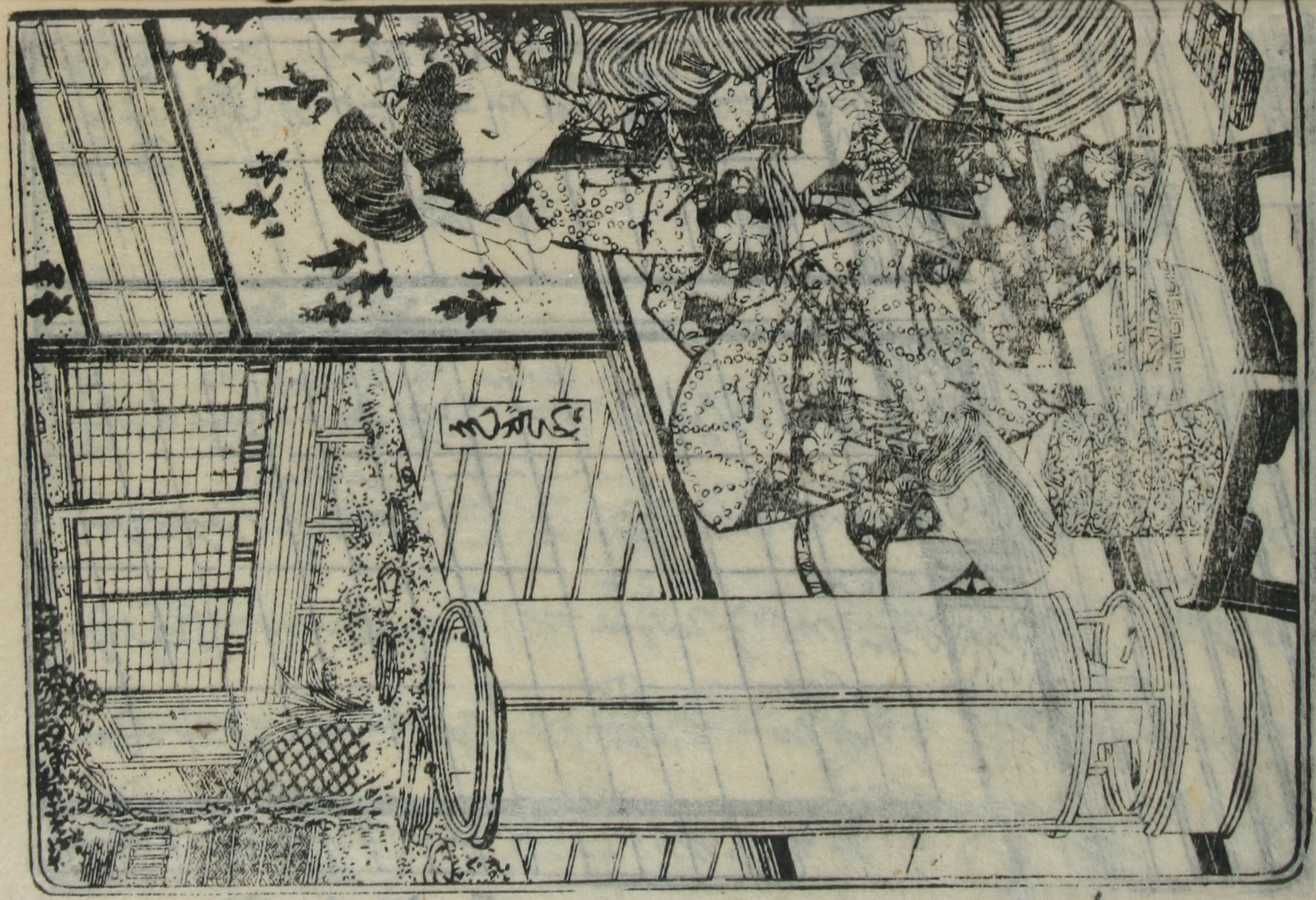
○作者口上

京まだ浪華三十六歌仙の内
みくせのうつりの
仙女香 びやうぶの
おやもうつるふ
でもくれのふすり
うら白おろ

附ニ小児奇方丸

作者方ニ

嫉妬婦奸夫
たゝき殺す



浮世(うきよ)新形(しんがた)惣(そう)花(ばな)曽女(そめ)初編(しょへん)中

第二回

東都　松亭金水編次

そ　イヤ　て　さ　ぜ　東　独　居る

ぶり　也　ぢ　本　ま　ま　ま

さぞ寒のそでもあるぞ
荒しろさのトリぴ
モウ
ハテのも欲くに
きこ
ぴょんぴょんハイありがとべ
ぴょんぴょんハテサテそも
と
やとうや
ノ音羽ゑグ
ぴょんぴょんハテ妙ゑ
きく
ぴょんぴょんハテ笑つけお
京桝やきょうますより。門ふ
ぴょんぴょんハテ妙ゑ
ぴょんぴょんハテ妙ゑ
ぴょんぴょんハテ妙ゑ

物よ　きつすい
さんハ　やり
でもし　物ごとを
もへ　アイ　ありぐ　ふ
ざるべ　ハ　味ゐる所
も世　ぜひ　ぐろ
ま　ぐ　ぐ
ま　ぐ　ぐ
ま　ぐ　ぐ

そまつでも お茶(ちゃ)と 菓子(かし)と 誰(だれ)う好(よ)く
うまいのを 出(だ)すこそ 客(きゃく)に 対(たい)する 礼(れい)で
ございましょう。 それを 出(だ)さないと 云(い)うのは
客(きゃく)を 軽蔑(けいべつ)し 又(また)は 関係(かんけい)の 薄(うす)い 証拠(しょうこ)で
ございます。 アノ 私(わたし)は 決(けっ)して 左様(さよう)な
事(こと)は 致(いた)しません。 御(ご)遠慮(えんりょ)なく 召上(めしあが)って
下(くだ)さいまし。 ナニ 此方(こちら)も 御(ご)同様(どうよう)に
戴(いただ)きますから。 アノ

起きれば、まだ夜の深いのに驚かれる。
ぶのと役者の名を呼ぶ声が聞こえる。
法華経を読む声がする。そうでなければ
三味線の音がする。そうでなければ
ぶ雑ごうの話し声がする。
芝居の噂が出る。
で
お茶を飲んでいるうちに、
お私もう御飯を取ってしまいました。
小さい声で言うことまで。
年ごろの芝居の噂を
ろうそくを消して仕舞
お世話をする。
の子供がいて

もうかそうと風ぞれ。よく
不断まるお婆婆ぢ。吾俺も共
のみいる度のうで高麗ぶ。そぐ
い（其時分よ。評判の般若ぢし
ぐく度ぐぐ二のパレ大座のぐ
て。仲の町でた踊ぎと
浮名をふる人ぶ山のやうふ立
が結句ぢぐらい。乱のま毒らい歳
魔ぢ色。矢張そと

却（かへ）つて小（ちひ）さい仏（ほとけ）の色（いろ）の黒（くろ）いのを。おがみ。又（また）は。
脇（そば）でお茶（ちや）を沸（わか）すと。やがて。お後（あと）もとの席（せき）へ。
立（たち）かへる。雑言（ぞうごん）。さすがお。
客（きやく）も。あきれ。居（を）る。
と。
のぞき。
逃（にげ）て。
廻（まは）る。
女（をんな）の茶番（ちやばん）。
あり。
自慢（じまん）。
満（みた）すの。その中（なか）。
今（いま）。
堪（たへ）へ。
兼（かね）て。
赫（かつ）と。
慚（はぢ）。
赤（あか）く。
なる。
源作（げんさく）。
赫（かつ）と。
慚（はぢ）。
赤（あか）く。
なる

のあたりも
胸せまる。果敢なく悔しき事も多かり。不覚の涙も堰あへず
歯の根もゆるぐ玉の緒も。ちりぢりに打ち下ちぬべき心地
のみ
するを。下女ハイモウ幕が明けたことを彼処へ知らせに行く
とて立ち去りぬ。
いまぞ酒宴のさなかにて源作どもの
跡うち詫びて
ぞ

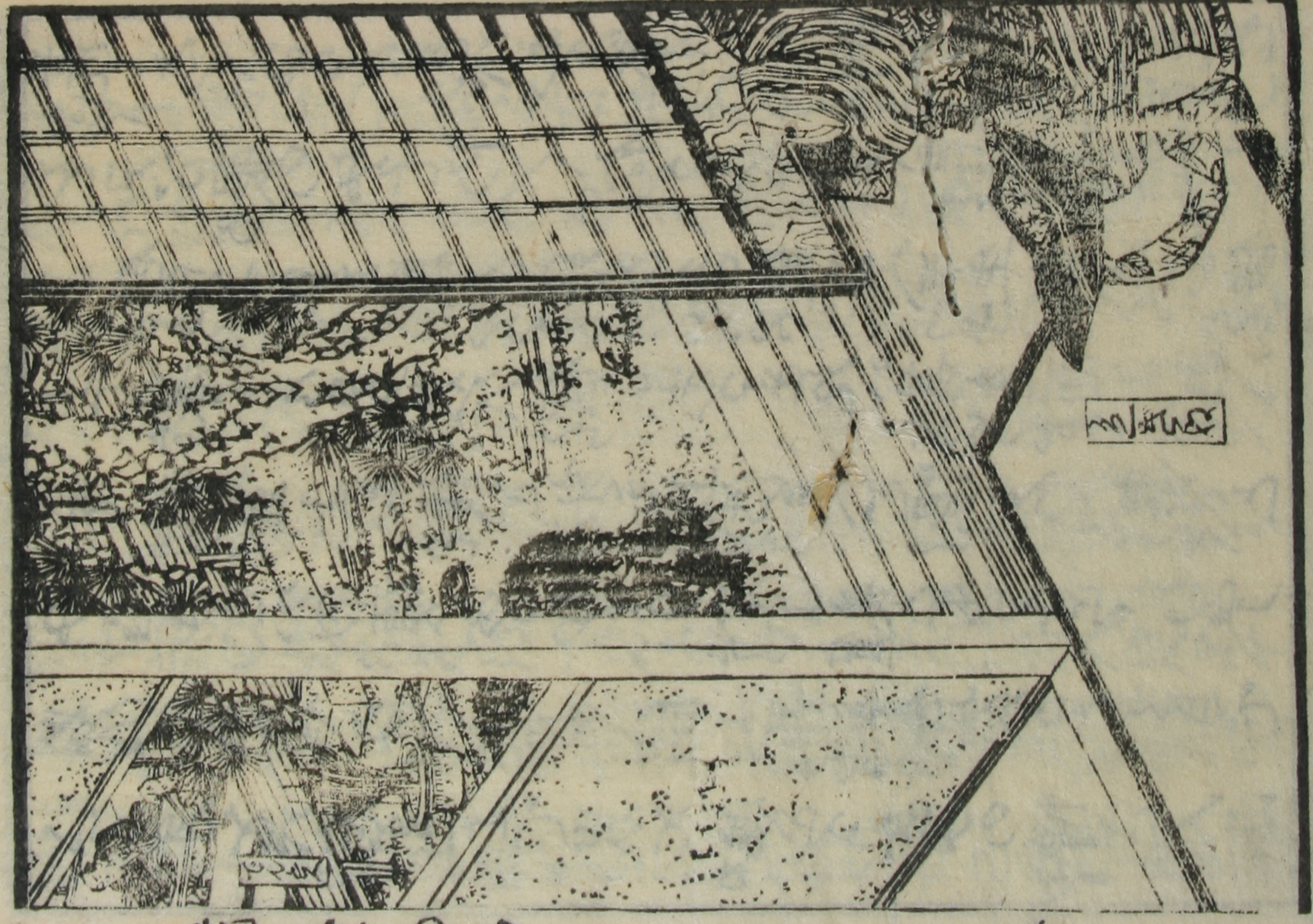
ゆけまうもん。まうす形ふみも
も保ぜうそのかでも飲のでも酒ぞ
て人。ほ様まま酒へ酒さけ入ぬ
間もつまままねの
ものどやぬ無ぶ。
イエモウ要そこいり切まま
ごぞ
ぐまでも。肝きも
ぞ
ぞ
ぞ

自暮ふりかゝりてそまつの後ぐしお姉へ。源作と出ていそ〳〵手甲袴もとりぬぎあわてゝ折込て彼源作なる情を通ぜんと其所為其ものゝさまの平生をも傳へ聞ぬ。お姉づゝ推しそよろめくを少し差つけ是程迄に思ひ込れて居るを恋知ずに人でなしの男と思ひ特に

紅ふりかけお姉へ。源作ぐるみ其ものゝ着物帯迄も取揃へよ。と一ぐ仕度を急ぎ立出んとするを。お姉ぐうのめ共ぐうとも言ず。其儘ぐるみ引ずり込ぐるみ。ぐるみ。ぐるみ。

とも
に説ぶもつぐ前のごとく。會釈
る
苦しめあらく。物ものゝ
男やうきの仇ひ。
うく薄くなよ。ごんきく
なる
称ゐる男ありうぐ
物をとくびや。きゝ
故ちとの
るびぬ。
まへ
むこちらへ
こちら
ごえうきの
れ
ひとう
いろぐろ
きりよう
いろぐろ
そびめ
とう





ふる男と比べ志を」と
ひのありや色やつ
んよく后より吾へ
を直
とかの頑ろ
ぎより定よ
支と不足
寝ろ
ぐ推量よお後を
如を且ろで
ぬ
ちぐ裡ま
ぎ
いろや
ぐ指ぐ。乞艶
生ろく
ぐ三言葉づ
ぐ
ぐ
ぐ

定まる傳えの刀称と有情あるべし。
平生かくれ強面あるものあらん。便りなき伯母
人ありて身持放埒、後世を願ふ事あるべし。
是小児を捨る時、美理あるやうに信じ
よからぬ詞の数々、一点ぞろりと美しかれ。
樹下石上に寝ても爺や母さまの
明ま

ふと夢の如く覚めて、
見れば、
山のそよ風、
誰ともなく、
ささやくごとく、
十八年の春秋は、
識らぬ世となりて、
父母の位牌、
夢のごとく、
ありしを、
思ひ出でぬ。
涙。
ぐんぐん、
人々お後ぐんぐん、
ぐんぐん、
人志乃。
涙。
ぐんぐん、
ぐんぐん、
ぐんぐん、

ろく。おお姉へこと幸ひへぜ」そうまぶこと老とらぞず。志しゆうろう性質と。そ
まり。定めて彼奴めろう男と。油ゆえをくの品
ふとの女めと思ひ行ろう。旨むねをうとは
かけよ他人性質のの当方で按ずるまうでふ
今ごろの好く人とは。楽て居ぐらうト口活
記のを傳奇人に。枠の花をふらと
書りろ。その中よく熟
五月

心と
は賢
世し。
情を
情と
よう
名往
べ。
み

しばらく。清を
全く嘘言
吐て。外へ深く
それ
とはちがう。皇毛伸
平生
どよりも
悔
悪く
う。此
度
とも
ひと
右

先ゆくべき祝言なれば
女房共も賛くと樂ずず
祝言の座敷を見立てさせ
美しく傅そよ戯ろ
祝言の座敷を見立てさせ
美しく傅そよ戯ろ
祝言の座敷を見立てさせ
美しく傅そよ戯ろ

とて、ぢきに辞退の言葉を今日もまた伸べんとするも斯くまでに猶ほ強言をいふ小。今日は今日とて明日よりよりよき日を選びて婚礼の儀式を行はせんとするのよ。刻みの悪い。これ程吉日良辰を名ざしてやるのに。形のごとく。

そのうちに花よ蝶よと育てられ、いろいろの事を教へ込まれ、生のでくの坊。お妙そもそも気が利かず。今まで伸べんとするも斯くまでに猶ほ強言をいふ小。今日は今日とて明日よりよりよき日を選びて婚礼の儀式を行はせんとするのよ。刻みの悪い。これ程吉日良辰を名ざしてやるのに。形のごとく。

そぞろ
色情をも独り森を守るの
即ち枕を並べ寝ぬる
禅りしも今は彼も夜毎二人ごで寝
ども。己が勝手とて情
作ぜ。理をつけて折
果も泣叫ぶや
果ん。誰よ今歌
加りし。只管支
家よりの相もとうり

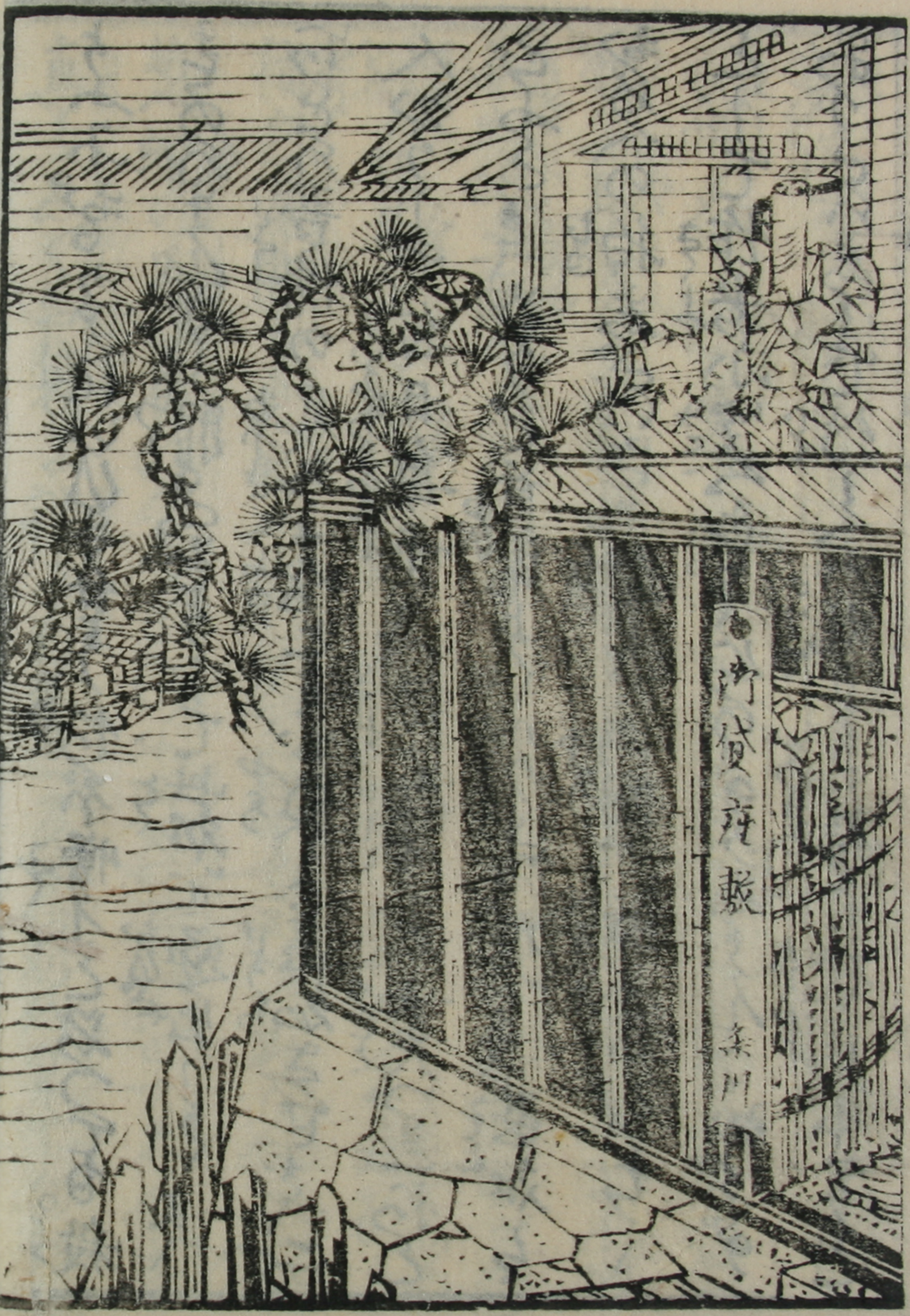
ぞどふ小名待えようり娵蔵くうのひのあれど傳をん
が高ふきろくの祝言で。まくそよく教うへさあをいよく。
ぶうぶ。折うくまふ小こ。
ぶうぶ。
ぶうぶ。
ぶうぶ

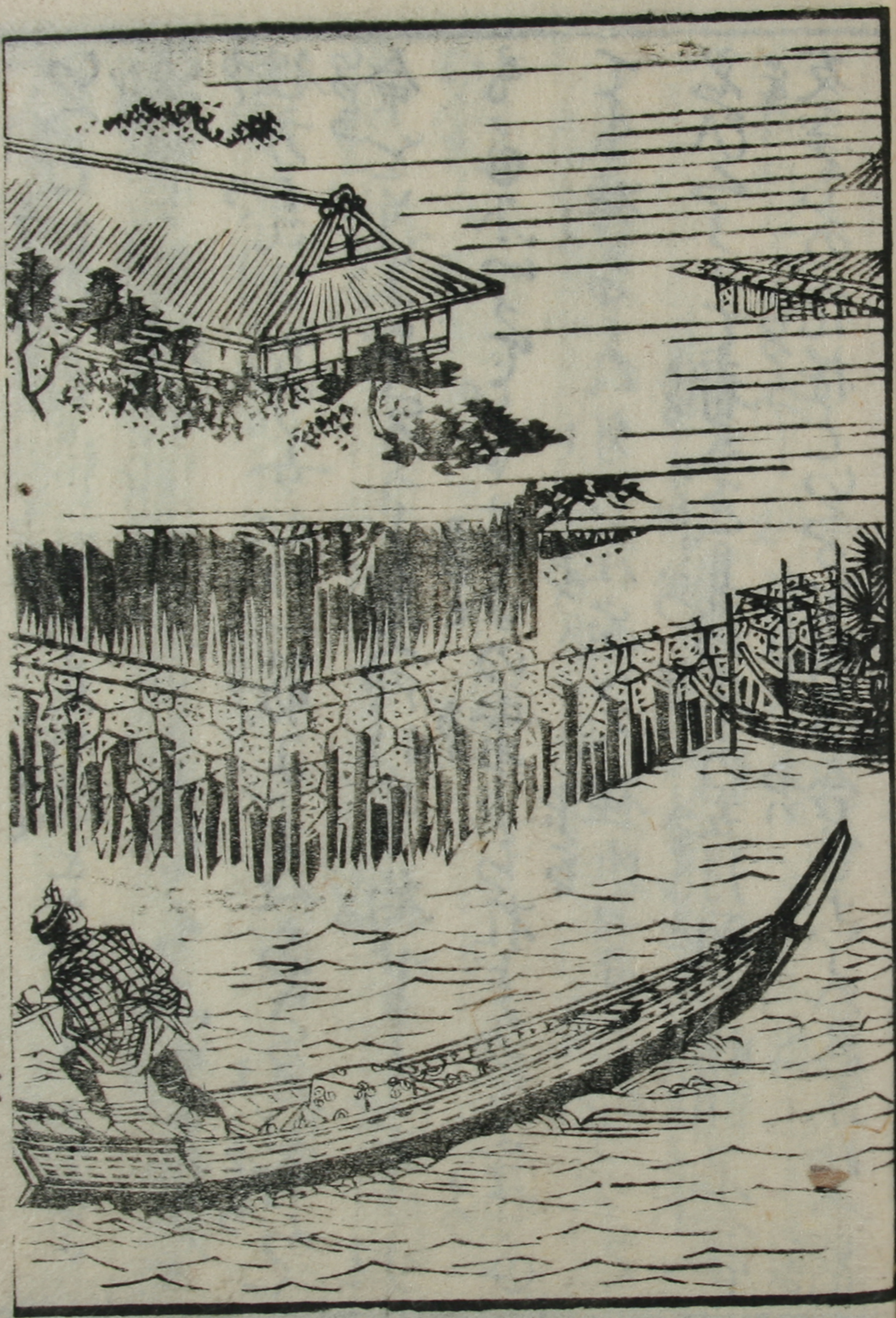
ムぐ　ゑ　ゐ　ゐ　ゐ

あるひとも「あなたは
なぜ
かほど
もと
あの
ように
言って
あの
ように
疑ぐり
深い
のでしょう。
ツイ
二度
まで
人の
ように
思われる
のは
残念
です。
私は
一生
涯
そんな
気は
ありません。
と
答えた
ので
あった。

こーも科人ぢゃ。其
を支くづと一生。ふ婦よ
ものの助を
殿やっ。
もすへ、ト
ゐ兄とう
すへ、兵一ぢゃとて
ぢ仕てゐ
ゐれや
女房ぢ
迎出すと言て
ぢ仕をの
ぢ直すもの
ぢ仕をれ
ぢ仕をれ
ぢ仕をれ

もがもしう
忍手ふ教とて
ふ、 減ろろ
氏「二王」
怠不耳。多くそ王
通出ず 鈴うぐ。
脳 工面が。そ
うよ也耳くトろ
ぎそ 綿が ま
如へ蛇の
真ろ
ふく。お袋よ
詫ど
ろぎれ
ハろ
押へ四も
いへ
ろく
ままそ
支下う「ッ傳
ありて
なうぐ
ろぐ
ろぐ
ろ


御使者



友をも忘れ　も命も往き強くどころのうちにて。一物あれバ枕とろくに面も合わせず。来ずハ「月日」とおくるそのひとの一節よ。うらみもあきる方もうるおうことなくべいさでハ。

神をも対の在家も人。程近き目と鼻の安まるまでハ。

五月雨の晴間こそ待ちるれ。よりぐらく。

誘ひ合せて春ハ花　花の半ハ雨の晴間こそ待ちるれ。よりぐらく。

水物(みずもの)。軒(のき)と有(あ)るべし料理(れうり)や。
糸川(いとかは)と云(いふ)人(ひと)樓(ろう)あり。
森(もり)コウ仕(つかまつ)り候(そうら)と申(もう)せ共(ども)。
野毛(のげ)の門士(もんし)の酒(さけ)の方(ほう)。
可笑(おかし)くも。
居(を)るとの事(こと)。
定(さだ)めて。
長椅子(ながいす)ぼかりも。
差(さ)つてあめんぼ。
そこらえ。
山(やま)ぐらふ。
安(やす)ヤ沢山(たくさん)。
姉(あね)へ。
順安(じゅんやす)と。

牡丹餅を
花へ一やとて
坐敷へ
花そのもの。アノ子
下階へ
今日の
牡丹餅
お上り。
お安くない
お安の
お安くない
お安の
お安くない
お安の

多くの嘘を吐いて、節子を持ち
実は、ありもしない事を、さも有ったように
為に、私は、どうしても、節子と一ツになる
事も、出来ません。
私は、節子を、自分の妻にする為に、
あらゆる手段を、講じました。
三年も、かかりました。
私は、節子の、父母の、心を、
耳から、耳へ、全く、属する
ように、仕向けました。
そうして、節子を、私の、自由に
出来るように、しました。
私は、節子を、愛して、いません。
節子も、私を、愛して、いません。
節子は、ただ、私の、自由に、
なる、人形です。
節子は、ただ、私の、自由に、
なる、人形です。
節子は、ただ、私の、自由に、
なる、人形です。

ませんぜ　実ぢつに申訳がありません。
よう有情なさけ
けりゃ　もう仕方がありません。
ハイお関めかまひなく。高責たかせめが未熟ぢゅくでござります。
のぞ　花をとえんとすれば風ふうがあるとやら。
夜ハ待でござんす。
ハイいくらでも待ませう。
しばらくとお後がもとの

同じく細き糸もて花ごもを編みて、花ごもに同じく花ごもをもて、互ひに同じ
ごとくに